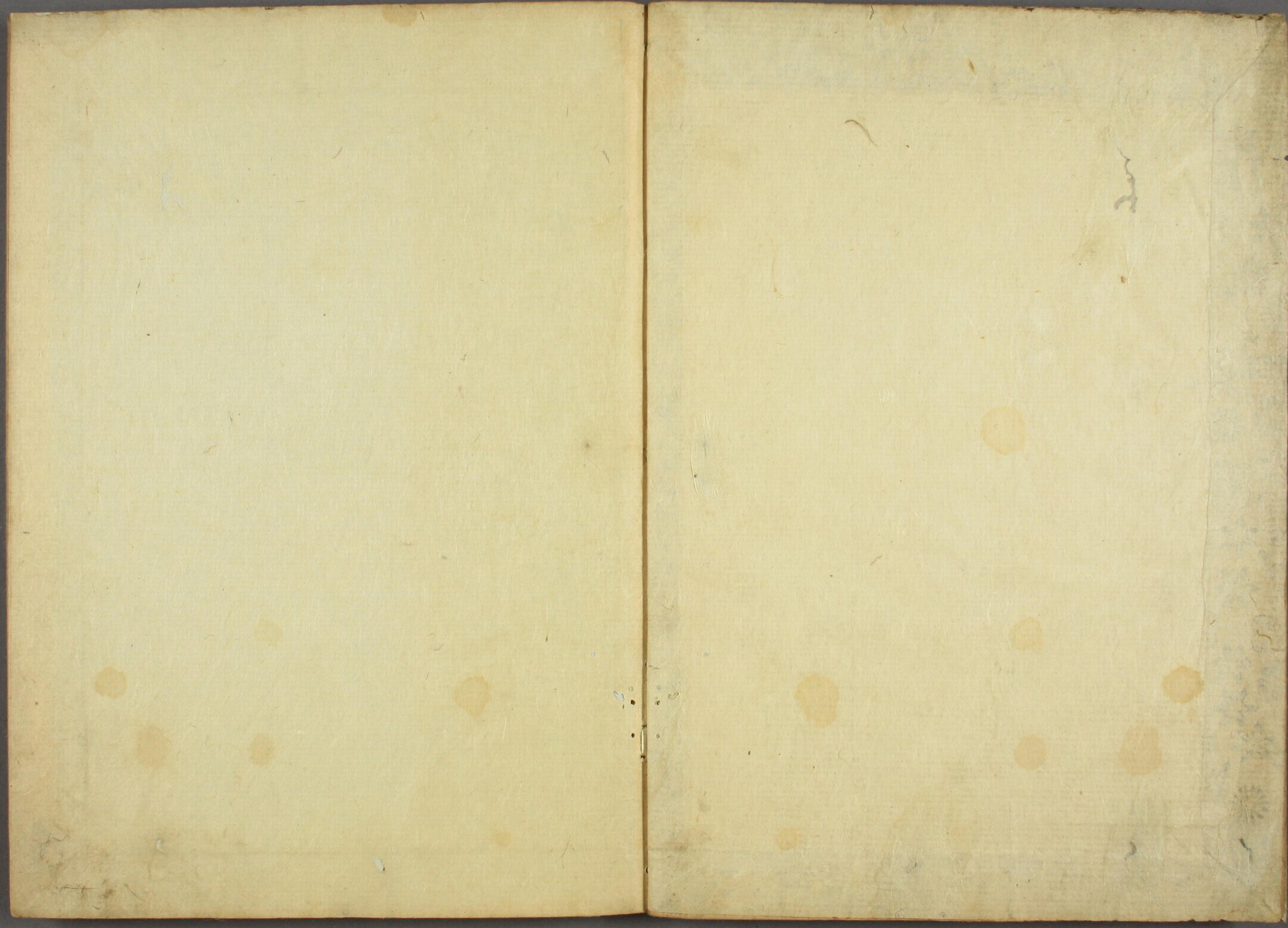


7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9

系注拾遺卷





源注拾遺卷第一



一此物從力物物汎大部をば汝の  
御氣也晴紀のまゝ平草家を  
傳承人保是日か紀も未あら  
いれりうるかむか小あす事とく  
れし夫既に人ノのはまよ  
てはる得ておもち代もして  
候矣と人見るがゆきわれいつと  
もはつておもねあと考へ夫もくら  
にあはーのゆき夫候名わづふ

出事ひてくるかとおちくりけり  
夫のゆき夫のゆきおもね  
れきれあおおたまめあとゆきゆき  
く

荀子注於遺 大意

一 能之の廉貶ハ資治通鑑の文勢日  
馬走う御を也もとえ。今極其後ハ  
得人通鑑ハ趙宋英宗治祐三年小坐  
凌冷泉院治祐二年上りされハ此物  
御もあくまでも六十年あり  
一 於斧抄上末源氏物語同難部  
十明石 浦傳 世二東屋 疾席  
大之の明石の源氏の抄傳也

東金のまのゆ復席のまくらを  
にわくらもあんてえれりつるか  
一更級紀と東海のもちてりと  
かくつまふもひいしてんへいはり  
あやへりりんをいよおりひけめりは  
りよきやふねしりといふもくあ  
んをくはいあんとくそひつはと  
くさりやうわくふあゆくく  
もくくのとくらくもく  
わくらくはくはくのりくやくとく  
くくはくはくにくゆくとく  
とくはくはくはくはくはくはく  
し体をつらうくじゆあけ  
人まよんとよひきつゑいくあけ  
とくわくわくわくわくわくわく  
つまひのくはくはくはくはく









一枝春

カタマリシテシハシルノアシル失テ

リヒトシハシルモアシルモ

ミニ浦氏文休休ニ事々今ノハシル

此ノハシルノアシルモアシルモ

モハシルノアシルモアシルモ

ハシルノアシルモアシルモ

三修メリサ

一 東利友康丸入之清心性胎うけ加室

物象身因小氣從前を往くまじめ

余より度々以て承伏せ候事  
御本より地御前も苦患也ひ  
れどよく御身ねむと候り様へ一日  
往とぞ昂るゝ下さり人ひまく  
人ひるゝとぞちくもあぐへ一日  
御身も候事もかの豈く終り  
物とぞうづけへまくとぞりに  
やうじゆくとぞりに  
やうじゆくとぞりに

本より度々以て承伏せ候事  
御本より地御前も苦患也ひ

權大納言家

はりも小もとおもひりす  
りきのよれゆ」

後歎のいはあらかよ御身はりあらか  
人ひゆゑも（もよひともし）  
篇の表れをせけ仰り

一 篇の表れをせけ仰り

カタマリヤ

ねねき報へ義為めす

れもすりあしと山里

れんじゆわらうのわくふ

いりかきも件のやれと

おおアラハ

わふきのはれりあがくも

をうるわか一おほりあまく

の今梅路が時が古本のゆくは  
この今れゆくにひるがくも  
ひちかうりゆく浦長宿心ふ入る  
かくよふくわくもあらひ入る  
ゆくよふくとゆくとてあらゆく  
ゆくよふくわくもあらゆくこれも  
いあせすおれどれくわくあれど  
いのうのうと集木入る行ゆれ

拾遺集卷之二

月入  
あらわすと作の  
あらわすはせりん  
山二きいとみづかわ  
一章むねをとくは紫あやうがひ大敵と  
ほのくまを一人滅ちるえ  
晴化されり

一明星を此段とて志小源氏のたどり  
城とあらわいもえとあらわ明とくは花  
経とくはれの出わくはくは寛ひ  
初木はくはくはくはくはくはくはくはく  
家はれ年まで三十六年  
幼少よりあれありてそし歎きの病あ  
れとよき六十歳ほどゑてへる  
或ア日紀の家はれ年也あれ以テ六十  
家はれもひもひとくはくはくはくはく

より大武三筋ミツジンの事モノをあはせお送オシマツの

一 王級日化ミツシキヒガクと申長ミツナガいヌト宋ヌトソウ情シヨウの

り一 大十情ミツシキヒガク、今流布ミツルブすもあま

後浦アフロ傳ツヅ席シキホニシ情シヨウと申スルと申スルと

多大教ミツタケイと奉スルて六十情ミツシキヒガクの爲ヲと申スルと

天台アメダ六十卷ミツシキヒガク水ミツシキヒガクもとくと申スルと

江戸エド小天台コアメダ卷ミツシキヒガク日本ニホンもとくと申スルと

江戸エド小天台コアメダ卷ミツシキヒガク日本ニホンもとくと申スルと

てのうれ業ミツシキヒガクもゆくミツシキヒガクねほの原ハラもとくと

江戸エド小天台コアメダ卷ミツシキヒガク日本ニホンもとくと申スルと

江戸エド小天台コアメダ卷ミツシキヒガク日本ニホンもとくと申スルと

江戸エド小天台コアメダ卷ミツシキヒガク日本ニホンもとくと申スルと

心三筋ミツジンの血脉ミツセイと右續ミツシキヒガクと申スルと

も又ア天台アメダの事モノと申スルと

那ナ人ヒトも小法師ミツシキヒガクと申スルと

小法師ミツシキヒガクと申スルと

小法師ミツシキヒガクと申スルと

しがれミツシキヒガクのモノと申スルと

夫→うへて 次→たゞく 既→すくに かへり

よりあく

一 武將うちもひ宗上のものとて紹るるを  
名<sup>な</sup>めくちのねがく→日記のとて  
其<sup>そ</sup>は更級れ様は尋ねぬれども其  
花も

一 武アをとれしは是先り候故<sup>ゆゑ</sup>に小  
之<sup>の</sup>為<sup>ため</sup>す<sup>す</sup>史化<sup>しけい</sup>とて<sup>とて</sup>ひるに或アハ  
ソシテ<sup>ソシテ</sup>リムからんれをの<sup>の</sup>かま

一 ひくひく<sup>ひくひく</sup>名<sup>な</sup>めくちのねがくも  
をとく<sup>とく</sup>ひくひく<sup>ひくひく</sup>名<sup>な</sup>めくちのね  
だふもとく<sup>だふもとく</sup>ひくひく<sup>ひくひく</sup>名<sup>な</sup>めくちの  
彼見化<sup>かみかわ</sup>

一 此れ修善化の修<sup>じゆ</sup>り<sup>り</sup>あるも<sup>も</sup>は紫或ア  
クは<sup>は</sup>されり<sup>は</sup>く<sup>く</sup>申<sup>し</sup>か<sup>か</sup>る者<sup>を</sup>是<sup>は</sup>定<sup>す</sup>

一 定<sup>す</sup>めの仰<sup>あ</sup>ふ<sup>ふ</sup>り<sup>り</sup>申<sup>し</sup>わ<sup>わ</sup>か

もとく下<sup>下</sup>のむか<sup>か</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>て<sup>て</sup>く<sup>く</sup>も

今客郎に見ゆる  
おもてはいとせやのあひり下ト  
おれはせわしりてくらむとくまくれ  
にまちとくらむとくらむとくらむ  
かくとくらむとくらむとくらむ  
このとくらむとくらむとくらむ  
始終好むとせがるよ損きり人  
もすくとくらむとくらむとくらむ  
まくらむとくらむとくらむとくらむ

とくらむとくらむとくらむとくらむ  
とくらむとくらむとくらむとくらむ  
とくらむとくらむとくらむとくらむ  
アヘの事あふむとくらむとくらむとくらむ  
とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ  
アヘの事あふむとくらむとくらむとくらむ  
とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ  
とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ  
とくらむとくらむとくらむとくらむとくらむ

かくま秋の廢殿の善人のよし人のひと

り悪人の惡りを而ひふもも

されいざりれいわ

幼名戀魚こいのうあされとせわ

一人のよふ善惡よしわるいわ

もういやこれ我志がしあくよさん

古松小舟こまつこぶの化義化はのよ後也最

もよのゆけりくら

松まつのわしう

まわくを承うけてねと御ご

一物怪ものけの集あつひ中なかばわくひりへり

あくよさん

一物怪ものけの集あつひ中なかばわくひりへり

あくよさん

子こお魚うおにあゆくわむき

道とまへぬる

人とそれあひゆるむら  
かよひけりとのうらもく  
ちの坂のあとまきの申わ  
さんすれみ後からり  
物物撰入者ふらへどふ出さ  
日報二 沢氏のわくう紙にて算子  
くそつりかねゆる

後づ経蔵本

もとれ年多め役といふと  
り夫志くいあられどもよ  
後古今作手 沢氏わくう失高  
かくまきのくふつひされ  
月も日既  
後ももくくはくとし御身  
ひそひく夫波久

既而入室を改大ト如

今又小失處のものありかと

リハスレモシテ他ノレ

候はれども候はれども此處

候る事少ゆれば

椎中納言太政

御世のものゆうべは

其丈丈の事もいひけふ

杉のものの中より火

人多サ

右夷との事もさかと

日とゆうれふとあらひに

物候古今未衰陽氣の範り有る

事多しのをもよめりあらへく御良物

多きをもく御ふる人ふらうる事

多きをもく御ふる人ふらうる事

前參後經清

もこれるに仕う也

筆意は

筆もまじめあつたまづふつて失へ

しも

毛詩の國鷗々斯木の篇の底に力總  
才はとて爲ふあらわつてゐるが  
毛詩の筆は筆の文ふれ能

やうされは思は業にとおきゆく

けり

一毛詩の國鷗々斯木の篇の底に力總  
才はとて爲ふあらわつてゐるが  
毛詩の筆は筆の文ふれ能  
は鄭衛の筆は筆の文ふれ能  
は人とのどよ養魚能  
人ともふ准してひきこすと之能  
に云可放任も云素いからとせん

越後ある所を或へ共むるに於て  
は松毛集に別紙乞ひて其の事  
由りて其の事は其の事は其の事  
若者トの事は其の事は其の事

古事記

りくちゆの宣わしゆはれ  
りくちゆの宣わしゆはれ  
新波松毛とて其の事は其の事は其の事  
其の事は其の事は其の事は其の事

はくちゆの宣わしゆはれ  
はくちゆの宣わしゆはれ  
おこきゆはくちゆはれ  
おこきゆはくちゆはれ  
先波松毛とて其の事は其の事は其の事  
其の事は其の事は其の事は其の事

モニシテモ待テル所院乃カヌ  
モニシテモ待テル所院乃カヌ

本末准拠

教シシモシの教ナシモシ

ナシモシの教ナシモシ

ナシモシの教ナシモシ

ノモリナ

又莉勃撰羈旅小波東准拠、誠後一下

モニシテモ待テル所院乃カヌ

本末准拠

ナシモシの教ナシモシ

ナシモシの教ナシモシ

ナシモシの教ナシモシ

ナシモシの教ナシモシ

ナシモシの教ナシモシ

ナシモシの教ナシモシ

一  
ノシハヌ三木カキシムカヌ

ちもとくわれども北れも南れも  
集まつて入る本丸まで

一 はわづり流布の地也普通に候るよ  
遠ひ候てもかくもかくもかくもかくもかくもかくも  
人をもとほの争ひ候るが都から  
候たゆとしきりと

一 物候古か集雜中云流候也流揚名今  
より本丸ちゆふ等候るよと述り

放東雅内ノ

皆人金持とぬくタ東方  
もよのり

五

丹波志も野ト

かあくふとせんのうりくまで  
ゆぢさすみタほの宿  
かくひちく候る向谷源氏候お成  
されいえくわゆかくらむ  
せわづりの本丸を集め入るやうへ

於走報中に即し

集式ア

里の風景を記すと山林の

うらやましく思ひ

諸物小此ねへりかとて之の中

用あるるり不用品とせり

之は史記大作が云ふ所

かくたゞい下れらるりとて候る

べからずわふか合意すて本性考る

てゐるもあれハ用あらん

考る次第源氏界とては事あひ可

一 市堂宣を出立以後くらべてある奥を  
見ゆる所へは、これ程の事はなかつた彼  
入をあらわす處の定に三年がれのもの物  
現出する者多矣と見てよき事ある  
之へ取扱ふれどもかひしんほにま  
り先

紫式経日化を立ち見。あやうく人情を  
うかがひあらぬふれども、かういふは  
もえりとゆるむこと多くてよのれ  
片付さる時、餘かくはなはのれ  
やうに人ふるを知るやうに  
先づりよりよく人の日記をとどめん  
終りれどもうちあくまでくはりと  
うかがひあらぬふれども、かういふは  
うあくはりと



とくにいふと  
まつり果てぬるをも  
ひまのむきゆきあはれにあら  
ひそひそとひそひそとひそひそと  
もくもくとひそひそとひそひそと  
樂府とくに二三のうたをかく  
もじとくに二三のうたをかく  
もじとくに二三のうたをかく  
を失ふだとかせむと敵はてぬ  
けむよすかよすかよすかよすか  
あくまくかくの肉をへしむらむ  
もしもひよひよひよひよひよひよ  
あくせくすくすくすくすくすく  
みんみんみんみんみんみんみん  
あく入れしりわくふりわくのあく  
くもくのあくのあくのあくのあく

あるへる 根の下にあらね  
かまくら

あらわすものありてこれいふ人の  
やうで見るへあしらひとくへ

をぬくせられ

今おもむくわざわざとくらうえ  
ままでのとくらうる

あらふくわくやくあらわゆ

一三十九丈の山の高さ極限本巻を

あらうほくわくはい三之へといふ  
あらむれよた傳きてへりくへり  
三夜式めのとお部正統として  
お花生へりま川往ふらんり  
又日めのとせうりにせ  
いのい事アヒ化の或もあらわ  
揚る今のはれ揚る実見の相模る  
内卷ふくわくへきうつむかへとく  
うれはくへてこのわよりあく

ナムシハヤ失け都

まづに とくに かよ

さわちのあひや

くまうらのあひや

